

「淡海温故録」の明智光秀出生地異伝と現地伝承について

井上 優

はじめに

明智光秀は一般に美濃国の出身とされるが、近江国で生まれた、という異伝がある。ほとんどの人には初耳であろうし、眉唾ものの与太話ではないかと、疑念に感じる向きも多いだろう。

かくいう筆者自身も、かつてその所伝について認知しながら、長年にわたって忘却してしまっていたのが実情である。二〇二〇年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」(一)の主人公に明智光秀が選ばなければ、一期を通して思い出すことがなかったであろう。

二〇一八年四月一九日に大河ドラマ制作について発表されるや、筆者の奉職する滋賀県庁の反応には素早いものがあつた。同日、県庁での知事会見(二)に始まり、五月一〇日には副知事と光秀ゆかりの天津市西教寺関係者らがNHK本社を訪問(三)、七月にはNHK関係者による知事への挨拶やゆかりの地への訪問、さらにロケーションハンティングなどが行われ、年度の前半期から矢継ぎ早にさまざまな動きが起きた。また、滋賀県が東京都中央区日本橋二丁目に設けた情報発信拠点施設「ここ滋賀」において、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課の専門技師らを講師とする「明智光秀」連続講座が年間七回開かれる運びとなつて、筆者自身も講師となりまずは六月一七日に「明智光秀の『聖地』滋賀―西教寺、聖衆来迎寺と坂本地域を訪ねよう―」と題して、光秀ゆかりの

社寺と文化財について紹介をおこなったのだった。

しかしながら、筆者の講師用務は一度では終わらなかった。秋季にもう一度、明智光秀について前回とは異なる講義を行うことを求められたのである。正直なところ「ネタ切れ」であり、大いに窮した。悩んだうえ、歴史少年であつた過去の知識を掘り起こし、明智光秀が近江で出生したという異伝のあることを発表することとした。さらに多賀町関係者の協力を得て異伝に書かれた現地の調査を行い、「明智光秀は近江で生まれた!?!知られざる近江国出生伝承を追う―」と題して、一〇月二一日に「ここ滋賀」での講師を務めることができた。

出生異伝の典拠は江戸時代前期(一七世紀)成立の「淡海温故録」おうみおんころうくであるが、その地誌の良質の写本が琵琶湖文化館に所蔵されている。館蔵資料紹介の意味も含めて、小論を草した。さらに、「淡海温故録」で出生地として記述された犬上郡左目(現在の多賀町佐目)の地には、現在も明智光秀の伝説を語り継ぐ人々がいる。単に書物だけの記述かと思いきや、今なお生きた伝承であることがわかり、筆者自身も驚きを禁じ得なかった。現地での聞き取り調査結果も含めて、ここに紹介したいと考える。

一、「淡海温故録」にみる明智光秀の出生地異伝

これまで明智光秀の近江出身説について触れた著述は、まことに数少

ない。筆者が記憶していたのは徳永真一郎『滋賀県人』（一九七六年、新人物往来社刊）に書かれた、次の記述である。

光秀は美濃国の土岐氏の一族といわれているが、近江愛知郡佐目村（湖東町）には、明智という地名があり、光秀が美濃の明智城落城ののち、叔父光安とともに住んでいたという明智屋敷跡というのが残っている。（四）

愛知郡佐目村は、正確には旧湖東町ではなく旧永源寺町域に属した。徳永氏の記述を頼りに近世の地誌を博捜してみたが、それに該当する記載は見当たらなかった。

しかしながら、近江国には郡違いの別の「佐目村」として、犬上郡佐目村（多賀町域）がある。改めて「犬上郡佐目村」の項について調べてみれば、複数の文献で明智光秀がそこで生まれたことを記している。

「淡海温故録」（貞享年間成立）、「近江輿地志略」（享保一九年成立）、「淡海木間攬」（寛政四年成立）の三地誌で、いずれも滋賀県の近世地誌を代表するものばかりである。徳永氏は、そのいずれかの記載を根拠として光秀近江出身説を紹介しながら、原稿執筆時に郡名を取り違えてしまったのであろう。

次いで、『多賀町史』（一九九一年、多賀町刊）でも近江出身説を下記のとおり紹介している。

膳所藩の儒者寒川辰清編『近江輿地志略』に次の記事がある。

佐目村畑也、明智十左衛門、生国美濃を立退き、土岐氏を背き此地に來り居住す。佐々木六角高頼扶助しおけり、十左衛門子十兵衛光秀、越前へ立越え朝倉に随從し後、信長に仕え立身し、終に逆意を企て、主君信長を弑し、秀吉に殺さる。

『多賀町史』ではまた、「淡海木間攬」や地元伝わる「馬場頼祐記録」（江戸前期）を引用する形で、明智光秀の多賀出身説について間接的に記述しているが、「これらは、当地方と光秀が関係したことを示すが、

明智氏の佐目村居住の史料は見つかっていない」と結ばれるなど、地元の自治体史でありながら、史実性を疑問視してか消極的な記述態度に終始している（五）。また、「近江輿地志略」、「淡海木間攬」を採り上げながら、それらが祖述した元の文献である「淡海温故録」を引用していない。

他にも、明智光秀の近江出身説について書いた著述がある。

犬上郡多賀町佐目には、織田信長に謀反をおこした明智光秀の出生伝説が残っています。文献史学では立証されていませんが、江戸時代の地誌『淡海温故録』には、美濃の土岐氏に背いた光秀の父・十左衛門が、六角高頼を頼んで佐目に居住し、二、三代居住したところ、十兵衛（光秀）の器量が優れており、越前の朝倉氏に仕えることを望んでいたことなどが記されています。（六）

地方新聞である『滋賀民報』に掲載された長谷川博美氏執筆のこの記事が、これまでで最も正確な記述であろう。明智光秀近江出生説の典拠史料は、「淡海温故録」、もしくは著者を同じくすると考えられる同系の史料「江侍聞伝録」とすべきである。

では、「淡海温故録」とはいかなる文献であろうか。同書のテキストを翻刻・公刊した唯一の刊行物である『淡海温故録』（七）巻末に収められた石川正知氏の解題「淡海温故録について」によると、数ある写本の中で大津市・片桐修三氏所蔵本に「貞享筆記、江州白頭翁著、彦根井伊公へ献上」と前書きのあることから、江戸時代前期の貞享年間（一六八四～八八）の成立であると推定している。石川氏はさらに、内容の近似した「江侍聞伝録」と同じ著者（木村重要）が著したものではないかと推定している（八）。「江侍聞伝録」（九）は寛文一二年（一六七二）成立であることから、「淡海温故録」は十七世紀後半の成立と考えて間違いないだろう。そのことは実は重要な点で、明智光秀の代表的伝記である高柳光寿『明智光秀』（一〇）が出自の根拠文献として採用しているのは、

安永七年（一七七八）編纂の「綿考輯録（細川家記）」である。高柳は光秀の出自を「どうもはつきりしない」としながらも、「綿考輯録（細川家記）」を根拠に美濃国出身と推定している。「淡海温故録」はそれより九〇年以上前に成立した文献であることに注目したい。

「淡海温故録」の内容的な特徴としては、郡別、村別の記載形式で地誌の体裁をとりながら、それぞれの地域における中世の土豪・地頭の家系についての記述が中心である。とりわけ、六角氏と関係の深い武将についての記述は詳しく、信頼性も高い（二）と評価されている。

こうした文献の特徴を踏まえつつ、「淡海温故録」における明智光秀の近江出身説を見てみよう。同書の写本は十一本ある（三）とされているが、今回は琵琶湖文化館蔵本（三）をテキストとする。四巻八冊本で、表紙法量は各縦二四・〇cm×横一六・六cm。幕末期の写本と考えられる。明智光秀にかかる記述は三乾（第五冊）巻之三「犬上郡左目」の項にあり、以下の通りである（原本での改行箇所を「／」で示した）。

淡海温故録卷之三

犬上郡

（中略）

左目 此処ニ明智十左エ門居住スト云、明智ハ本国美濃ノ者ニテ土岐／成頼ニ属セシカ、後ニ成頼ニ背テ浪人シ当国に來リ、六角高頼ヲ頼ミ寄／ケル処、屋形曰明智ハ土岐ノ庶流旧家也トテ扶助米ヲ与ラレ、二三代モ此処ニ居／住スト云、息十兵衛光秀ニ至テ、器量勝レタル者ニテ越前ヘ立チ越朝倉／家ニ仕ンコトヲ望ム、其節往来ノ道中ニテ川流ノ大黒天ヲ拾ヒ人ニモ語ラス／秘シ置キシカ、好身ノ者共ノ取持ニテ朝倉殿ヘ目見相調テ、義景ヨリ二／十貫ヲ賜リ屋敷モ拝領シテ後、近処ノ諸士取持ノ人々等ヲ祝儀ニ呼登／参会ノ上ニ、彼拾タル大黒天ノコトヲ語リケレハ衆人皆目出度コト也ト祝、明／智聞テ川流ノ大黒ヲ拾ヒ何分ノ幸ヤアルト聞及玉フト云ヘハ、



淡海温故録（琵琶湖文化館本）4巻8冊

人々ケルハ／大黒ヲ拾ヘハ千人ノ頭ヲ持ト古今云習セリ、然レハ貴所ハ追付御取／立物大将ニナリ玉ハント云、衆人皆退散ノ跡二十兵衛独言シテ曰、吾ノ千人ノ頭ハ全ク望ニアラス、信仰シ頼ムトモ千人ニ限ラハ詮ナシト、又川ヘ流シテ／朝倉家ヘハ本国ヨリ尋求ラル、間販リ度由ヲ申シ、暇ヲ乞直ニ尾碕ヘ／行信長公ニ属シ段々立身シテ、惟任日向守ト改メ丹波一国ニ当国志賀ノ郡ヲ添賜リ大身トナレリ、兼テハ更ニ逆意ハアラサリシヲ、不慮ノ思立出テ／甲刃武田家ヲ語ラヒケル処ニ、勝頼ニ滅亡故存念相違シタル由甲／陽軍鑑ニモ見ヘタリ、然処其年五月、家康公穴山梅雪ヲ御同道ノニテ上洛ノ時、光秀ニ馳走役ヲ信長公仰付ラル、其馳走ノ支度不／宜トテ蹲居タル光秀ヲ足ニテ踏玉フト云、光秀思ヤウ、扱ハ我逆意ヲ知／テ如此ナルヤト覚悟シテ早速逆心シケルト也、然レトモ大恩ヲ請ケナカラ天理ニ背／キタルコト故一人モ与力加勢スル大名モナケレハ、昔ノ旧キ好身ヲ尋当国ノ先／方共ヲ頼ミケレトモ外ハ一人モ同心セス、多賀新左衛門、久徳六左衛門、阿閉淡路ノ守、小川土佐守、後藤喜三郎、池田伊予守六人ハ運尽テ同心シ、山崎ノ／一戦ニ没落シ皆零落ニ及ケル、此中二小川土佐守、池田伊予兩人ハ理リア／リテ秀吉公ニ降参シテ相続ナレトモ終ニハ両家共ニ断絶ス

活字本となった「稽古蔵本」との校異について詳しくは註(二四)に同本のテキストを引用して示すが、濁点や送り仮名の有無、異体字の使用を除けば、ほぼ同じである。

ここで語られていることは、まず第一に「明智十左衛門」が近江国犬上郡左目(佐目にも作る)に居住していたという所伝。明智は本国美濃の者で土岐成頼に属していたが、成頼に背いて浪人となって近江国へ来り、六角高頼を頼ったという。頼られた高頼(屋形)は明智が土岐氏の庶流であることから扶助米を与えて佐目に住まわせ、その後二三代を経て明智十兵衛光秀が生まれたという。土岐成頼(一四四二―一四九

七)は美濃国の守護大名で、応仁の乱以後守護代の斎藤妙椿を擁して京都や近江など各地に出陣して勢威を振るったが、反面で家臣の離反や動揺も少なくなくなかった。一般に明智光秀は『明智軍記』などを根拠に、弘治二年(一五五六)の明智城落城によって美濃から逃れたとされているが、それからおよそ六〇年以上前の時期に、先祖が土岐氏を離れて六角氏に扶助されていたという異伝である。

佐目に住み始めたのは二三代前の先祖にあたる「明智十左衛門」とするが、通称のみで諱や事績などは伝えられていない。光秀の父の諱を明智光綱、光国、あるいは光隆などとする諸系図などに比べてあいまいな所伝のようでありながら、かえって伝聞として自然で、作為がないようにも感じられる。この記述によって光秀は、多賀町佐目で生まれ育ったと解釈できよう。

その後に書かれるのは、器量優れた光秀が朝倉家への仕官を望んで越前へ向かう道中、「川流れの大黒天」を拾うことで幸運をつかんだという逸話である。光秀は大黒天の功德と好身(よしみ)の者どもの取り持ちによって朝倉義景に仕官でき、「近処ノ諸士取持ノ人々等」を呼んで祝宴を設け、その席上で大黒天のことを告白。同席者から大黒天の功德で千人の長たる物大将に出世すると言われたが、却ってその程度では信仰しても詮なしと感じ、朝倉家を辞して尾張の織田信長に仕え国持ち武将へと立身出世したことが語られている。同様の明智光秀大黒天功德譚が山鹿素行「山鹿語類」(二五)などにも載っており、それらによると光秀は「芥川」で川流れの大黒天を拾ったことになっているが、澤田順子氏は「芥川」は多賀町内を流れる「芹川」の誤写・誤伝ではないか(二六)と

の見解を示している。首肯されよう。

さらに、光秀が甲州武田氏と内通していたが武田勝頼の死で果たせず、安土城を訪れた徳川家康の馳走役を務めた際に信長に踏みつけられたことで、主君に逆意を悟られていると感じ謀反の覚悟を決めたという話を

[illegible]

- 20 -

伝える。天理に背く謀反に同心する大名がない中、出身地である近江で「昔ノ旧キ好身(よしみ)」を訪ねて、ようやく多賀新左衛門、久徳六左衛門、阿閉淡路守、小川土佐守、後藤喜三郎、池田伊予守の六名を味方につけたが、山崎合戦の敗北でみな没落してしまったというエピソードで結ばれている。

テキスト内容の評価については本稿第三節で検討するが、以上が「淡海温故録」の出身説である。本節の最後に、光秀近江出身説について書かれた他の二地誌についても触れねばなるまい。「近江輿地志略」の記述については、先に『多賀町史』に引用されたものを紹介したので割愛する。「淡海木間攪」(寛政四年成立)の記述については、ほぼ「淡海温故録」を祖述したものと見て差し支えない。ただ、末尾に「明智明弁ナリト言ヘトモ叛逆ヲクワタテ主君ヲ殺シ奉リシ罪忽焉トシテ立所ニ滅亡セリ。嗚呼人臣タル者ハ五常ノ道ヲ守忠孝ノ心ヲ失フヘカラサルモノナリ。」(二七)と付け足し、逆臣たる光秀に筆誅を加えているのが「淡海木間攪」記述における唯一のオリジナリティといえる。

二、滋賀県犬上郡多賀町佐目に伝わる明智光秀の出生地伝承

次に、オーラルヒストリーとして今なお滋賀県犬上郡多賀町佐目に伝わる、明智光秀の出生地伝承について紹介したい。

調査は地元・佐目出身で地域史研究家の澤田順子氏(二八)の協力、案内を得て、多賀町教育委員会の本田洋氏、森谷忍氏とともに二〇一八年一〇月四日に実施した。佐目は古くは「左目」あるいは「佐女(谷)」などとも書かれ、犬上川北流沿いの鞍掛峠を越え、近江国から美濃国へと通じる街道の途中に位置するため、中世から近世にかけては交通の要衝であった。現代でいえば、滋賀県多賀町多賀から三重県いなべ市藤原町を経て、岐阜県大垣市上石津町へ至る国道三〇六号線を、多賀町中心部か

ら約6kmほど東進した地点にあるが、全国的な信仰を集める多賀大社から山道をわずかに上っただけで、すっかり山々に囲まれた山村風景が広がる地域である。寛永石高帳では高二〇七石余、元禄八年(一六九五)における人口は男二〇三人、女二〇二人、寺社方四人の計四〇九人(二九)。主な生業は畑作、稲作、林業、炭焼等で、特産品に葛籠草があった(三〇)。

大字佐目の中に、小集落として「上出(かみで)」集落がある。大字全体からみて東端部の小高い場所に位置し、大字の惣社である十二相神社の門前に集落が展開する。十二相神社は少彦名命を祭神とし、創建年代は不明。岐阜県海津郡南濃町志津にも分神として十二相神社(小谷神社)があるという(三一)。社殿の正面両側には樹齢五〇〇年以上とされる杉の巨木が四本屹立し、境内には室町時代前期(一四世紀)造立の石造宝篋印塔(三二)をはじめ、大量の一石五輪塔や石仏など中世の石造品が密集している。

その十二相神社への参道、本殿へ向かって左側(東側)の広い畑地のことを、地元では今も「十兵衛屋敷」と呼び、明智十兵衛光秀の屋敷跡であると言いつづけている。昔から住宅がなく、畑だった(三三)という。十兵衛屋敷から東方を見上げると、遠方に衝立のように頂部が平らな「ジンヤ(陣屋)山」が望まれる。見晴らしがよく、頂上に立つと街道や村々をはじめ、遠く琵琶湖まで見えるという。相当に高い山だが、十二相神社から登山道があり、大字佐目全体の住民が畑作(作物は牛蒡、大根等)のため頻繁に上り下りしていた(三四)。城郭研究者の長谷川博美氏は、「ジンヤ(陣屋)山」について郭の跡で、中世城郭の前哨基地である「出郭(出丸)」であると推定している(三五)。地域の歴史を記録した『佐目郷土史』によると「昔この山に武将が陣取っていた」ことが山名の由来であるとも伝えている(三六)。

「ジンヤ(陣屋)山」からさらに奥山へ登山道を上ると、標高八三三mの「高室山」山頂部へと至る。中世城郭(山城)の遺構として、滋賀

県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査五（旧愛知・犬上郡の城）』に「高室山城」として記載されている（二七）。また、同報告書に佐目一向道場（遠久寺）の前進基地として「籠城山城」も掲載される。昭和六一年度に同城の調査を担当し、縄張り図を作成した福島克彦氏に今回教示を求めたところ、「土塁囲みのしつかりとした山城だ。コンパクトに無駄なく構築されており、一定の目的に特化した城としての印象が強い。地域の土豪の城などではないと思う」（三八）との見解を得た。

話を山麓の上出集落に戻すと、十二相神社の門前に位置するこの集落には、「見津（けんつ）」を名字とするイトウ（一統、一党）が集住している。各世帯の家紋は「抱き茗荷」で、彼らの祖先は総て、明智光秀の家臣であったと伝えている。

筆者が佐目上出集落で聞き取りを行った相手は主として、見津さと子氏（昭和二十四年生まれ）である。同氏は大字佐目で生まれたが元は別姓で、同じ佐目の見津家に嫁いで見津姓となった。小学生のころ（昭和三〇年代）、佐目が明智光秀ゆかりの地だと聞いていたという。具体的には、後に嫁ぐこととなる見津家の門前に、「カミサン池」という小池（湧水池）があり、それが明智光秀ゆかりの池なのだと聞かされた。何の「ゆかり」なのかは知らない。現在は井戸のような状態になっているが、昔はもっと池らしかったという。

さらに嫁いできた時、見津家こそが明智家臣の子孫であることを教えられた。光秀の諱から「光（みつ）」をいただいた（偏諱―筆者註）ので本来「見津（みつ）」と称するべきところであるが、光秀は謀反人であるため憚って「見津（けんつ）」と読んでいるのだと伝え聞いた。

ただし、系図や過去帳などの文字史料があるかないかは、私（見津さと子氏）には分からない。近年では見津イトウの世代替わりが進んで、古い言い伝えを話せる人が少なくなってきた。オモヤ（本家）は見津新一家であるということだ（二九）。



カミサン池
明智光秀ゆかりの池という



十二相神社への参道 向って左側の空地と
畑地が「十兵衛屋敷」＝伝光秀住居跡



昭和10年の見津氏一族（古写真）
奈良東大寺大仏殿前にて撮影



多賀町佐目の風景
正面に見える山頂部が「高室山城」

そこで見津新一家を訪問し、在宅の奥様からも聞き取りを実施した。同氏は見津さと子氏よりやや年長ながら、佐目の外から嫁いだため詳しい伝承を知らないという。ただ、見津イットウは「落ち武者やと聞いている」と語られた。古文書や過去帳などの文字史料もあることを知らないが、昭和一〇年三月一四日に見津イットウが奈良東大寺に遊んだ時の記念写真があると見ていただいた。写真の台紙裏書などによると、そこに写った最高齢の人物は見津与作氏で、当年七九歳と記されているから、安政四年（一八五七）生まれということになるか。謀反人の家臣の子孫として逼塞しながら、近世を通して（少なくとも「淡海温故録」が成立した一七世紀半ば以降）光秀から賜ったという偏諱を大切に伝え続けてきた見津一族の歴史の重みが、古写真から伝わってくるように感じた（三〇）。

三、明智光秀近江出身説の考察

以上に示した近世文献（江侍聞伝録、淡海温故録、近江輿地志略、淡海木間攬）、および口述伝承（見津さと子氏ら）に伝えられた「明智光秀近江出身説」について、その真偽や意味するものについて若干の考察を行いたい。

まず前提として改めて明智光秀の出身地説を整理しなすと、次の六カ所が挙げられる。

- ① 美濃国可児郡明智莊長山城（岐阜県可児市瀬田長山）
- ② 美濃国恵那郡明智城（岐阜県恵那市明智町）
- ③ 美濃国土岐郡瑞浪土岐町（岐阜県瑞浪市土岐町一日市場）
- ④ 美濃国山県郡中洞（岐阜県山県市中洞）
- ⑤ 美濃国石津郡多羅城（岐阜県大垣市上石津町上多良）
- ⑥ 近江国犬上郡佐目（滋賀県犬上郡多賀町佐目）

それぞれの説総てについて本稿では詳しく批判・考察する余裕をもたないが、いずれも根拠となる文献史料は近世に成立した系図や地誌の類であって、光秀在世中の史料を根拠とした生誕地説ではない。明智光秀の出身地＝生誕地を明確に記した一次史料は何処にも存在しないのである。すなわち、光秀は土岐氏の血脈を引く人物だから美濃国で生まれたと考えるのは予断の産物で、考察抜きで美濃出身と断定することは全くの偏見に過ぎないということを指摘しておきたい。

もちろん、今回紹介している近江出身説についても一七世紀成立の地誌が根拠であるので、それを「史実」として確定することは不可能である。そうした意味では、あくまでも歴史的状況を追究していく中で、近江出身説の「可能性」がいかほどのものか考察していくことになる。

まずは、根拠文献の史料価値についてである。先にも触れたように、近江説が記された代表的文献は貞享年間（一六八四～八八）成立の地誌「淡海温故録」、及び同一著者による原著と考えられる寛文一二年（一六七二）成立の「江侍聞伝録」であった。一方、現在定説的となっている上記①の美濃国可児郡明智莊説の文献的根拠が「美濃国諸旧記」である。同書の成立年次は不明ながら、寛永年間の記事があるため寛永末年（一六四四）の成立とされているようだ（三三）。しかしながら、その推定は文献批判の方法としては不十分なものである。

その謂いならば、「淡海温故録」の記事下限も同じ寛永年間である。同書の記述は中世の地頭・在地武士の事績に重きを置いているため江戸幕府成立後の記事は少ないが、寛永期の記述が若干見受けられる。年次を明記しているのは寛永九年（一六三二）の浅井長政への従二位贈位記事が唯一だが、幾つか寛永年間のできごとと推定できる記事があり、寛永二〇年（一六四三）の一絲文守（仏頂国師）による永源寺再興が下限と見て良い。「貞享筆記」と書かれた写本が知られていなかったなら、「淡海温故録」もまた「寛永末年成立」と推定することが可能だったこ

となる。記事の下限をそのまま成立年次とするのは危険なやり方だ。「美濃国諸旧記」の成立年次は、記事の下限である寛永年間から若干の幅をとって一七世紀後半ころと推定すべきであろう。さらにまた、「美濃国諸旧記」には高柳光寿『明智光秀』に「誤謬充満の悪書」と評された『明智軍記』と類似する記事が多く、一次史料と一致しない記載も見つかっている^(三三)など、「史料としての信憑性は極端に低い軍記物」^(三四)であって、内容的な信頼性については疑問の多い文献だといわざるを得ない。

可児郡説に次いで著名な②美濃国恵那郡明智城説の根拠は、先にも触れたように安永七年（一七七八）成立の「綿考輯録（細川家記）」の記述である。肥後細川家の公式家史として編纂された史料ではあるが、成立年次が新しく史料価値は高くない。一八世紀に入ると戦国期の記憶を直接伝えることのできる人はいなくなっていたし、系図にせよ家伝にせよ軍記にせよ、史実を歪曲した偽史・偽伝が盛んに制作される時代となった。二次史料の中でも、一七世紀成立のものの一八世紀以降成立のものとは明確に史料価値を区別すべきである。すなわち、美濃国出身説は可児説にせよ恵那説にせよその他にせよ、それが記された近世文献の史料価値が思いのほか低い。

「淡海温故録」の内容についても注目してみよう。まずは、明智名字の地が近江国にあったと主張しているわけではないことを押さえておきたい。明智が土岐氏の分流にあたる美濃の国人であることを認めたい。光秀からみて二三代前の当主であった明智十左衛門（諱は伝えない）が美濃国守護職の土岐成頼に離反して浪人し、六角高頼に扶助されて佐目の地に住したといっているのである。

これは、極めて自然なストーリーである。応仁の乱で西軍の雄として活躍した土岐成頼（一四四二～一四九七）は、守護代斎藤妙椿を擁して近江・越前・伊勢など美濃の隣国に勢力を及ぼした。しかしながら、文

明一二年（一四八〇）に妙椿が死去して以後、守護代斎藤家や土岐氏の相続争いなどが相次ぎ勃発し（船田合戦など）、美濃国内の土岐一族や家臣団、隣国の六角・京極・朝倉・織田や幕府をも巻き込みながら、国内を二分した戦いが長く続いた^(三五)。最終的に妙椿の後継争いに勝利した斎藤妙純は出陣先の近江で、息子や一族とともに戦死してしまうなど、近江は土岐勢力の紛争に深く関わったのである。その間、妙純と対立した斎藤利藤や石丸利光らは相次いで近江の六角高頼に庇護を求めてきた。

こうした情勢の中で、光秀の先祖が美濃を離れて六角高頼に扶助されたとしても不自然さはない。所伝としても、「明智光秀の父が明智光綱で祖父は光継」など諱だけを書き連ねて通称を伝えず、出来すぎた感のある系譜ではなく、「通称十左衛門の二三代あとに十兵衛光秀が生まれた」という飾り気のない話となっていて、伝承として素直である。

しかも近年、明智光秀の歴史上の初出史料が永禄九年（一五六六）より前、近江高島郡田中城の籠城戦であるとする説が示されている^(三六)のが興味深い。すなわち熊本藩次席家老米田家文書に含まれる典籍「針葉方」の奥書に「右一部、明智十兵衛尉高島田中籠城之時口伝也」と記されており、その聞書き記録を米田貞能が永禄九年一〇月二〇日に近江坂本において筆写したというのである。

この説は非常に注目を浴びていて、これをもって信頼性の高い史料における光秀の初出と考える動きが強まっている。そうであれば、明智光秀の歴史上の初登場は近江だったことになる。橋場日月氏はこの説に注目して高く評価しているが、籠城を命じたのは足利義輝だったと見ている^(三七)。橋場氏は田中城（高島市安曇川町田中）籠城に連なる明智、田中、比良、米田、沼田、細川の諸士が婚姻や主従関係で強固につながっていたことにも注目しており、まさに慧眼というべきだが、田中城の籠城を命じたのは足利義輝ではなく、六角氏と考えるのが自然だろう。橋

場氏自身が、「(高島七頭と呼ばれた有力国人) 田中氏は当時近江の戦国大名、六角義賢(承禎)の支配下にあった」^(三七)と述べている通りである。

すなわち、明智光秀の歴史上の初登場は、六角氏の指図のもと近江田中城で籠城したこととなる。一見すると唐突な「史実」であるが、歴史以前の伝承として、光秀が六角氏の庇護のもと近江佐目で生まれていたというストーリーを下敷きにして聞けば、俄然得心をえてしまう思いを禁じ得ない。

川流れの大黒天の話はファンタジー色が強いので割愛するが(地元佐目での聞き取りでもこの話は伝えられていなかった)、この話に登場する「近処(きんじょ)ノ諸士」(「淡海温故録」)こと多賀新左衛門、久徳六左衛門、阿閉淡路守、小川土佐守、後藤喜三郎、池田伊予守の六人^(三八)が本能寺の変後、運きて明智光秀に同心し、山崎合戦に敗れて零落したという「淡海温故録」の指摘には鋭いものがある。確かに、いずれも信長政権の旗本衆で、犬上郡多賀町内に名字の地をもつ多賀、久徳両氏をはじめ、全員が琵琶湖東岸側の近江国出身部将であって、山崎合戦に明智光秀方として参戦していることは間違いない。本能寺の変後、琵琶湖南岸の瀬田城(大津市)を拠点とする山岡景隆とその一族を初め、光秀の与力などとして縁の深かった近江衆が必ずしも光秀に味方しなかったことと比べて、多賀の周辺に勢力を持つ国人層が目立って光秀方に付いたことは事実である。ところが彼ら六人には信長政権下で光秀と与力であった事実がなく、史料上光秀と特に親しい経歴が認められないので、なおさら明智方に付いた理由が納得できない。ところがこれまた、実は明智光秀が犬上郡佐目の生まれで、六人が本当に「旧き好身(よしみ)」(「淡海温故録」)の者たちであったと仮定するならば、山崎参戦の必然性がすっきりと理解されてしまうのである。

実際、本能寺の変後の天正一〇年(一五八二)六月六日、明智光秀が安土城に入城した翌日付で多賀社中(多賀大社)に発給した禁制の正本

が『多賀大社文書』の中に伝えられている^(三九)。本能寺の変後、光秀が発給した禁制は多賀大社のほか離宮八幡宮(大山崎)、賀茂別雷神社(上賀茂・貴船)あてなど現存五通にすぎず、その一通が多賀大社充てであることは注目される。武家の多賀氏や久徳氏は多賀大社の近隣に本拠があり、いずれも大社に関係の深い一族である。光秀が明智方に与党した多賀・久徳氏の産土神である多賀社に禁制を発給したのは当然ともいえるが、京畿から遠く離れて当面の戦場となりそうにない多賀社へ早々に禁制を出したことに、光秀自身の積極的な意志や信仰が根底に潜んでいるようにも感じる。

また、多賀地域には多賀氏と久徳氏が犬上郡内の武士を光秀方に誘ったという所伝もある。『多賀町史』が紹介する元禄二年(一六八九)土田村馬場氏の記録に「明智殿逆心之以後、山崎古我縄手合戦之砌、多賀新左衛門尉・久徳六左衛門尉ニ被誘候而、光秀卿方ニ罷有牢々仕」^(四〇)とあるのがそれだ。犬上郡の土豪土田氏は多賀・久徳氏に誘われて光秀に味方し、山崎合戦に参戦したということだが、それにしても一七世紀の段階で逆臣にして自家没落の原因をなした明智に対して、光秀「卿」の尊称を付して呼んでいるのであり、土田氏自身も明智光秀に対してただならぬ親密感を抱いていたことがわかる。

このように、「淡海温故録」のストーリーを史実と照らすと、なかなかの説得力がある。また、多賀町佐目地域で、明智光秀家臣の末裔といわれる「見津(けんつ)」一族を中心に、今なお語り継がれる光秀生誕地伝説にも、非常に興味を惹かれる。伝説の根幹は、光秀が住んだ「十兵衛屋敷」の跡地と、光秀ゆかりの「カミサン池」の存在、さらには見津氏が光秀の偏諱である「光」から由来していることの三点である。他にもあれやこれや、面白おかしく詳細な伝説があつて良さそうなものがあるがそうではなく、至ってシンプルである。「カミサン池」などは、光秀産湯の井などと言いそうなところをいわず、何のゆかりかわからな

いが「ゆかりだ」という率直さが却って印象深い。見津氏がどのように主君に対する功績を挙げたかなどという自慢話もない。「吾こそは」という自己主張抜きに、ただただ「ゆかりの地」を守り、ひっそりと暮らしてきた家系史には相当な重みがあるというべきだ。ただ、見津一族には筆者が調べ得た限り、伝承を裏付ける文字史料がいつさい存在しない。ゆえに厳密に言えば、本当にこの一族が近世・近代をとおして光秀出身伝説を伝え続けてきたのか、直接的な証拠がないということになる。だが、見津一族が明智の「落人」として逼塞しつつ伝説を口伝し続けてきたとしたら、むしろ文字史料には残らないのが自然であろう。長崎県生月島のカクレキリシタンが口伝のみによって、ラテン語の「オラシヨ（祈り）」を三五〇年以上連綿と伝え続けてきた事実^(四二)に照らしても、決して無視できない伝承であると筆者は考える。

しかも、明智光秀が多賀近隣地域の出身だったと仮定すると、彼のエピソードとして語られる、諸国巡歴、薬字の知識、鉄砲の巧者、諜報の巧者といった逸話に共通の筋書きが考えられる。光秀は「多賀坊人」と密接な関係があったのではないか、という推測が生まれてくるのだ。多賀坊人は下級の社僧として諸国を巡り、延命長寿の多賀信仰を広めた集団^(四三)で伊勢や熊野の御師、高野聖などと同様の役割を果たした。坊人の中には甲賀衆らが含まれ、修験道とも結びつきながら活動したため、薬字、鉄砲、諜報などの知識や技能に通じる者も多く^(四四)、光秀の謎の前半生が多賀坊人と共にあった可能性を想像させるに難くない。むしろ、これ以上に想像をたくましくすることは歴史学の範疇を越えてしまうので立ち止まるが、光秀近江出身伝説の奥に広がる世界は、実に豊かである予感がある。

まとめにかえて

これまで、江戸時代の文献史料、ならびに多賀町佐目の地で聞き取った伝承に基づき、明智光秀近江出身伝説について紹介し、内容の検討をおこなってきた。結論として、近江出身伝説は良質の一次史料（同時代文書）に書かれたり、傍証されているものではないので、「史実」として捉えられる真正の歴史ではない。

しかしながらそれは、美濃国で生まれたとされる従来説（恵那市、可児市など）でも全く同じことで、近江説もそれらと同列である。信頼できる史料に「美濃国住人、とき（土岐）の随分衆也」^(四五)とあることが指摘されているが、それは明智氏が元来美濃の国人で、かつては相当な身分で土岐氏に仕えた名門であったことを伝えているに過ぎない。光秀自身は身代を失い「瓦礫沈淪の輩」であったとの認識を自ら示している^(四六)。

むしろ、美濃出身各説の典拠となる近世文献の史料価値があまり高くない（そのことは本稿で述べた）なかで、近江出身説を記した「淡海温故録」は一七世紀における地域の古伝承を素直に採録していて、注目できる。また、滋賀県犬上郡多賀町佐目には、今なおさまざまな伝承や中世の史跡を伝え、多賀町内には天正一〇年の明智光秀禁制を所有する多賀大社がある。山崎の合戦で光秀側に与党参戦した国人・多賀氏や久徳氏の本拠地も多賀町内にあり、光秀出身伝説の地としてふさわしい環境を備えている。

近年、明智光秀の歴史上の初出事件が、永禄九年以前の近江国高島田中城籠城戦であったともいわれている。小和田哲男氏は光秀の生涯において「歴史以前」とそれ以後を区別すべきことを示唆された^(四七)が、それに従えば光秀にとって「歴史」の出発地は近江国だったのであり、

「歴史以前」の事柄である出生地を考える上においても、今後ますます近江を重視していかねばならない。

筆者にとって明智光秀近江出身説は当初、奉職する滋賀県庁による発信戦略の一環として取り組んだ話題のひとつに過ぎなかったというのが率直なところだが、ささやかな調査研究を進めるに及んで、決して「荒唐無稽」とは言い切れない迫力のある伝説であることが分かってきた。多賀町佐目での聞き取り調査の案内人となってくださった澤田順子氏が「伝説が多賀町内でも佐目の内部にしか知られず、なかなか外に広がらない状況に煩悶していた。誰か来るのを待っていた」と告白されたことは、特に印象的であった。

そうした意味で、小稿では重く閉ざされていた扉を少しだけ開けてわずかに風を通したのみに過ぎない。現地調査はほんの二、三時間程度、ごく限られた範囲で行っただけで、とても伝説の全容に迫ったものとはいえない。今後は澤田氏や地元佐目、多賀町の関係者を初め、各分野の専門家が参加してさらに調査研究を深化・活性化し、広く全国からの批判を受けていくことが求められよう。本稿がそのための小さな契機となることを願ってやまない。

註

(一) 二〇二〇年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」

「麒麟がくる」は、大河ドラマの原点に戻り、戦国初期の群雄割拠の戦乱のなか、各地の英傑たちが天下を狙って、命をかけ愛をかけ戦う、戦国のビギニングにして「一大叙事詩」です。

脚本は、第二九作「太平記」を手がけた池端俊策のオリジナル。

大河ドラマとしては初めて智将・明智光秀を主役とし、その謎めいた前半生に光があてられます。

(NHKホームページ「速報&会見」から抄出 二〇一八年四月一九日配

信Ⅱ二〇一八年一月三〇日閲覧)

(二) 県を挙げて明智光秀をPR 滋賀県知事、NHK大河決定で、喜びの俳句を披露(共同通信ニュースサイト 二〇一八年四月二六日配信の電子版ニュースⅡ二〇一八年一月三〇日閲覧)

(三) 大河「麒麟がくる」、滋賀で撮影を 県関係者らNHKに要望(『京都新聞』二〇一八年五月一〇日二時四〇分配信の電子版ニュースⅡ同日閲覧)

徳永真一郎『滋賀県人』(一九七六、新人物往来社) 一一二頁

(四) 『多賀町史』(一九九一、多賀町) 四五〇～四五二頁

(五) 長谷川博美「俯瞰図でみる近江の山城その八 多賀町佐目の城の巻」『滋賀民報』第二〇九一号、二〇一一年十一月二十七日) 四面 掲載

また、二〇一四年に坂本城を考える会の主催する記念講演「明智光秀

の故地は近江か」が開催され、長谷川博美氏と丸山竜平氏の両名を講師に、明智光秀多賀出身説について「淡海温故録」などの文献と地域の伝承を紹介するとともに、佐目の中世城郭との関係が指摘されているようである(gooブログ 城郭探訪 講座「明智光秀の故地は近江か」講師：長谷川博美氏・丸山竜平氏 二〇一四年五月一八日配信Ⅱ二〇一八年二月一三日閲覧)。

(七) 滋賀県地方史研究者連絡会編『近江史料シリーズ(二) 淡海温故録(稽古蔵本)』(一九七六年八月、同会刊)

(八) 石川正知「淡海温故録について」(前掲『近江史料シリーズ(二) 淡海温故録(稽古蔵本)』所収) 九五～九七頁

「江侍聞伝録」の写本は滋賀県立図書館蔵のものが知られており、その奥書に「寛文壬子仲秋集書之 木村重要誌」とあることから、寛文一二年(一六七二)成立であることがわかる。内容は、近江における中世の土豪・地頭の家系について記述したもので、地域別の記載方式とはしないものの「淡海温故録」とよく似た構成で、記述内容にも明らかに共通の情報が採用されている部分が認められる。

活字化された文献として石川正知翻刻「江侍聞伝録(上)(下)」(『滋

『滋賀県地方史研究紀要』第二号、一九七三・第三号、一九七四 滋賀県立図書館刊 所収）があり、明智光秀佐目出身説や川流れの大黒天譚についても下記のように記述されている。

佐目之里ニ明智十左衛門ト云侍濃州ヲ退ニ三代居ス、息十兵衛光秀越前義景エ式百石ノ約ニテ越ス道に川流之大黒天ヲ捨ケル、扱至一乗之谷テ諸士ニ是ヲ語見ケル諸士之曰、大黒ハ千人之頭ト云コトニ川流ヲ猶尊信シ利益ニ叶ト云フ、光秀曰ク吾千人之大将ヲシ非本望トテ捨ケルト云、果テ万士之大将ト成暫モ天下ヲ知事、生付テヨリ度量広事如斯、元江州生国故山崎表合戦節当国衆多ク与力シテ皆世ニヲチケルト一読してわかるように、「淡海温故録」記述の根幹部分についての情報は、すでに寛文一二年（一六七二）の「江侍聞伝録」に記述されていることがわかる。「書きぶり」も極めてよく似ていて、引用ではなく同一著者が同じ情報をもとに別に書いた文献として間違いではないであろう。「江侍聞伝録」の内容にさらに、多賀新左衛門、久徳六左衛門ら光秀同心武将の動向などについて付け加え、全面的に書きなおして完成させたものが「淡海温故録」と考えることができる。

(二〇) 高柳光寿『明智光秀』（人物叢書）一九五八、吉川弘文館

(二一) 石川正知「淡海温故録について」（前掲）九七頁

(二二) 石川正知「淡海温故録について」（前掲）九五頁

(二三) 琵琶湖文化館蔵「淡海温故録」の基礎データは次のとおり。

品質形状…紙本墨書（料紙は楮紙）、袋綴冊子装、四卷八冊

表紙法量…各冊縦二四・〇cm×横一六・六cm

江戸時代（幕末期）書写本

滋賀県備品台帳情報

書蹟、番号七一六号、品名…淡海温故録八冊、取得年月日…昭和二八年五月六日、取得単価…不明、取得先…思文閣より購入

取得年月日から推して、前身施設である滋賀県立産業文化館の時代に購入され、昭和三六年（一九六一）の琵琶湖文化館開館に伴い移管された資料である。入手担当者は、産業文化館および琵琶湖文化館の初代学

芸員にして、滋賀県教育委員会における最初の美術工芸担当技師を兼務していた宇野茂樹氏（一九二一〜二〇一八）と考えられる。琵琶湖文化館の基礎的コレクションを形成した宇野氏の功績について、改めて顕彰したい。

(一四) 滋賀県地方史研究者連絡会編『近江史料シリーズ（二）淡海温故録（稽古蔵本）』（前掲）四七〜四八頁所収のテキストを引用する

左目 此処ニ明智十左衛門居住スト云フ、明智ハ本国美濃ノ者ニテ土岐成頼ニ属セシカ、後ニ成頼ニ背テ浪人シ当国に來リ、六角高頼ヲ頼ミ寄ケル処、屋形曰ク明智ハ土岐ノ庶流旧家也トテ扶助米ヲ与ラレ、三代モ此処ニ居住スト云フ、息十兵衛光秀ニ至テ、器量勝レタル者ニテ越前ヘ立テ越前朝倉家ニ仕ンコトヲ望ム、其節往來ノ道中ニテ川流ノ大黒天ヲ拾ヒ人ニモ語ラス秘シ置キシガ、好身ノ者共ノ取持ニテ朝倉殿ヘノ目見エ相調ヒテ、義景ヨリ二十貫ヲ賜リ屋敷モ拝領シテ後、近処ノ諸士取持ノ人々等ヲ祝儀ニ呼ビ参会ノ上ニ、彼拾タル大黒天ノコトヲ語リケレバ衆人皆目出度コト也ト祝ス、明智聞テ川流ノ大黒ヲ拾ヒ何分ノ幸ヤアルト聞キ及ビ玉フト云ヘバ、人々云ケルハ大黒ヲ拾ヘバ千人ノ頭ヲ持ツト古今云ヒ習ハセリ、然レハ貴所ハ追付御取立大将ニナリ玉ハント云フ、衆人皆退散シテ跡二十兵衛独言シテ云ク、吾千人ノ頭ハ全ク望ニアラズ、信仰シ頼ムトモ千人ニ限ラバ詮ナシト、又川ヘ流シテ朝倉家ヘハ本国ヨリ尋ネ求ラル、間帰リ度キ由ヲ申シ、暇ヲ乞ヒ直ニ尾州ヘ行キ信長公ニ属シ段々立身シテ、惟任日向守ト改メ丹波一国ニ当国志賀郡ヲ添賜リ大身トナレリ、兼ネテハ更ニ逆意ハアラサリシヲ、不慮ノ思ヒ立チ出テ甲州武田家ヲ語ラヒケル処ニ、勝頼俄ニ滅亡故存念相違シタル由甲陽軍鑑ニモ見ヘタリ、然処其年五月、家康公穴山梅雪ヲ御同道ニテ上洛ノ時、光秀ニ馳走役ヲ信長公仰付ラル、其馳走ノ支度不宜ト云テ蹲居タル光秀ヲ足ニテ踏玉フトテ、光秀思ヤウ、扱ハ我逆意ヲ知テ如此ナルヤト覚悟シテ早速逆心シケルト也、然レドモ大恩ヲ請ケナガラ天理ニ背キタルコト故一人モ与力加勢スル大名モナケレバ、昔ノ旧キ好身ヲ尋ネ当国ノ先方共ヲ頼ミケレドモ外

ハ一人モ同心セス、多賀新左衛門、久徳六左衛門、阿閉淡路守、小川土佐守、後藤喜三郎、池田伊予守六人ハ運尽テ同心シ、山崎ノ一戦ニ没落シ皆零落ニ及ビケル、此中二小川土佐守、池田伊予兩人ハ理リアリテ秀吉公ニ降参シテ相続ナレドモ終ニハ両家共ニ断絶ス

＊濁点や送り仮名の有無、異体字の使用を除き、大きな相違点は二点で、ひとつは「稽古蔵本」で「貴所ハ追付御取立大将ニナリ玉ハン」とある部分が琵琶湖文化館本で「貴所ハ追付御取立物大將ニナリ玉ハン」とあること。すなわち前者「大將」が文化館本で「物大將」となっている点。物大將は「ある隊を統率する長、侍大將の類」を意味し、『日本国語大辞典』第十卷三四六頁 一九七六、小学館）、近世前期に用いられた用語として相応しい。文化館本の方が原テキストを正確に伝えていよう。もうひとつは「稽古蔵本」で「勝頼俄ニ滅亡故」とある部分が文化館本では「勝頼ニ滅亡故」となっている点。この点は、文化館本が「俄」字を脱字している可能性が高い。

- (二五) 山鹿素行「山鹿語類」『山鹿素行全集』帝国報徳会、一九一五 三六四頁

師曰く、惟任光秀今そかりける時、芥川にて大黒を拾ひけり。時人皆云ふ、大黒を拾はば、千人の頭となるなりと云ひける沙汰を或人の云ひければ、早く大黒を弄てさせける。志気尤も大なりと云ふべし。

- (二六) 澤田順子発表「多賀町佐目の歴史文化を発掘・発信する」(二〇一九年一月二〇日、於…多賀町立博物館、滋賀県教育委員会主催)

- (二七) 滋賀県地方史研究者連絡会編『近江史料シリーズ(五) 淡海木間攪(第一分冊)』(前掲) 四五～四六頁

- (二八) 澤田順子氏は多賀町佐目出身で株式会社マルト取締役。建築士として活躍の傍ら、多賀坊人の三木家に伝わる「三銀蔵」資料をはじめ、地域史料の調査・研究や保存・活用に幅広く尽力されている。

- (二九) 日本歴史地名大系第二五巻『滋賀県の地名』(一九九一、平凡社) 七九八頁

- (三〇) 角川日本地名大辞典二五巻『滋賀県』(一九七九、角川書店) 該当項目か

ら抜粋。

澤田順子氏とともに佐目で聞き取ったところでは、佐目村の際立った特異点として、他に①大昔に關所があった、②通婚圏が広く、ごく近所の村とは婚姻しない(女性は美人が多い)、などの逸話が聞けた。かつて交通の要衝として独特の位置にあった地域の特徴を反映した、興味深いエピソードといえよう。

- (二二) 多賀町十二相神社境内揭示の案内板の記述による。同様の記述は田畑喜與門『佐目郷土史』(一九七四)にもある。

- (二三) 石造宝篋印塔の年代観については、多賀町教育委員会・本田洋氏の教示を得た。

- (二四) 見津さと子氏(多賀町佐目在住)からの聞き取りによる。同氏については、さらに後述。

- (二五) 見津さと子氏および澤田順子氏(前掲)からの聞き取りによる。

- (二六) 長谷川博美「俯瞰図でみる近江の山城その八 多賀町佐目の城の巻」(前掲)

- (二七) 田畑喜與門『佐目郷土史』(私家版、一九七四)

- (二八) 滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査五』(一九八七) 二〇頁。籠城山城については同書三四頁および二四〇頁。

- (二九) 福島克彦氏から二〇一八年一〇月一二日に聞き取り。

- 同氏は城郭研究者・明智光秀研究者で、現京都府大山崎町歴史資料館長。世に知られる限りの光秀文書を集めた藤田達生・福島克彦編『史料で読む戦国史 明智光秀』(二〇一五、八木書店)などの著者としても知られるが、滋賀県委嘱の調査員として多賀町籠城山城を調査した一九八六年当時は、佐目に光秀生誕地伝説のあることを知らなかったという。

- (三〇) 以上、見津さと子氏(多賀町佐目在住)からの聞き取りによる。本文にも示したが、同氏は昭和二十四年(一九四九)生まれで話者としては随分若年だが、佐目生まれで佐目の男性と結婚して見津姓となったため、昭和三〇年代段階での地域伝承を承知している。

- (三一) 以上、見津節子氏(多賀町佐目在住)からの聞き取りおよび資料提供に

よる。ちなみに見津イットウのオモヤである見津新一家において記録される最も古い人物名（俗名）は、見津与作の義父にあたる見津駒治郎（一九世紀中葉生まれか）である。

- (三二) ウィキペディア（インターネット百科事典）「美濃国諸旧記」の項。二〇一九年一月三日閲覧

- (三二) ウィキペディア「美濃国諸旧記」の項（前掲）

- (三三) 小和田哲男『明智光秀』（一九九八、PHP研究所）三四頁。ただし、小和田氏は同著のなかで「細部は軍記物作者の創作だったとしても、光秀の拠る明智城が斎藤義龍の軍勢に攻められたことは事実だったのではないだろうか」として、明智光秀の出生地を岐阜県可児市広見・瀬田地区であると推定する立場をとっている。

- (三四) 岐阜市歴史博物館『特別展 土岐氏の時代』展示図録（一九九四）三七頁解説

- (三五) 村井祐樹「幻の信長上洛作戦」（『古文書研究』七八号、二〇一四）九一頁

- (三六) 橋場日月『明智光秀 残虐と謀略』（祥伝社、二〇一八）

- (三七) 橋場日月『明智光秀 残虐と謀略』（前掲）二八頁

- (三八) 谷口克広『織田信長家臣人名辞典（第二版）』（吉川弘文館、二〇一〇）などを典拠に山崎合戦にいたる六人の主なプロフィールを示すと、次の通り。

- ①多賀新左衛門尉（貞能、？～一五八七）近江犬上郡（多賀町）の土豪。

元亀元年以降、信長に従い丹羽長秀の与力となったか。本能寺の変後、明智光秀に応じ、蒲生賢秀を勧誘したが、断られたという。そのまま光秀方として山崎の戦いに参加する。

- ②久徳六左衛門尉（生没年不詳）近江犬上郡久徳（多賀町）の出身であろう。六左衛門尉は「太閤記」山崎合戦の記事にしか見えないが、久徳左近兵衛尉が信長家臣団に属していたことがわかっている。左近兵衛尉は元亀元年信長に降り、その賞として多賀荘・石灰荘・敏満寺領等にて三千石を宛行われた。堀秀村、ついで一時秀吉に附属され、そ

の後旗本将となる。本能寺の変のとき、久徳六左衛門尉が明智方として出陣（「太閤記」）。

- ③阿閉淡路守（貞征、？～一五八二）近江浅井郡山本山城主（長浜市）。浅井長政の部将であったが天正元年信長に降参、朝倉攻めに参加後秀吉の与力となる。後信長の旗本将となっていたようだが、本能寺の変後、明智光秀に加担して、変報を受けるやいち早く秀吉の長浜城を占領する。その後、山崎の戦いに参加して敗戦。秀吉方に捕われ、一族と共に殺された。『惟任謀反記』によると、磔刑にされたという。

- ④小川土佐守（祐忠、生没年不詳）近江神崎郡小川（東近江市）の人。旧主六角氏没落後の元亀二年、信長に降参。のち信長の旗本衆。本能寺の変後、明智光秀方に付いて山崎の合戦に参加。

- ⑤後藤喜三郎（高治、？～一五八九？）もと六角氏の臣。永禄六年六角義治に謀殺された後藤但馬守賢豊の二男という。永禄十一年、信長の侵攻を受け六角氏を離れて信長に属す。のち信長の旗本衆。本能寺の変後、近江を経略した光秀に味方し、山崎の戦いに参加する。

- ⑥池田伊予守（景雄、一五二八～一五九七）近江甲賀郡池田の出身らしいが、蒲生郡小井城に居住したといい、大体の活躍地は蒲生郡。信長の上洛に際してすぐに六角氏から離反、信長に降参。元亀年間は柴田勝家の与力、次いで佐久間信盛の麾下に属し、佐久間追放後は信長旗本将となった。本能寺の変後、光秀に降参したらしく、山崎の戦いには光秀方として参陣している。

- (三九) 滋賀県指定有形文化財「多賀大社文書」一三六通（書一五）多賀大社所有のうち。

翻刻は藤田達生・福島克彦編『史料で読む戦国史 明智光秀』（二〇一五、八木書店）一一五頁などに掲載されている

- (四〇) 『多賀町史』上巻（一九九二）四五〇～四五二頁

- (四一) 宮崎賢太郎『カクレキリシタン』（角川書店、二〇一八）など

- (四二) 『多賀町史』上巻（前掲）二九〇頁など

- (四三) 澤田順子『三銀蔵』（二〇一八）

（四四）「立入左京亮入道隆佐記」『続群書類従』第二〇輯上。禁裏上御倉職・

立入宗継（一五二八～一六二二）の覺書を集成したもので、宗継（立入氏は近江野洲郡立入＝現守山市が名字の地。宗継自身、たとえ京で生まれて朝廷に仕えていても本貫地は近江であるから、「近江国住人」と呼ばれたであろう）は織田政権と関わりが深く、明智光秀と同時代に活躍した人物であった。

（四五）「明智光秀家中軍法」（尊経閣文庫蔵）

（四六）小和田哲男『明智光秀』（前掲）三四頁

＊

本稿の成立にあたって、見津さと子氏、見津節子氏をはじめとする多賀町佐目在住のみなさまから、聞き取り調査やその取りまとめ等について格別の高配を得ました。

また、澤田順子氏、多賀町教育委員会の音田直記氏、本田洋氏、北村竜二氏、森谷忍氏、多賀町立博物館長の小早川隆氏、糸本夏実氏、一般社団法人多賀観光協会の土田雅孝事務局長、火口悠治ボランティアガイド会長など多賀町関係者のみなさまにも数々の便宜やご教示、協力を得ました。

福島克彦氏（大山崎町歴史資料館長）、木戸雅寿氏、仲川靖氏、松下浩氏、大崎康文氏（以上、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課）、上野良信氏、渡邊勇祐氏、國分政子氏（以上、滋賀県立琵琶湖文化館）、井上ひろ美氏（文化遺産プランニング代表）、中川敦之氏（栗東歴史民俗博物館）にはご教示と各種の情報提供を得ました。

古川史隆氏、矢田直樹氏（以上、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課）には「明智光秀近江出身伝説を発掘・発信しよう」事業（後述）における実務を分担実施する中で、種々の支援や助言をいただきました。松田千春副局長、ここ滋賀推進室の辻良介室長補佐をはじめ、滋賀県観光交流局のみなさんとは「明智光秀」連続講座の企画・実施を協働で実施し、本稿成立の契機を与えていただきました。

なお、滋賀県立琵琶湖文化館の志村恵子氏には原稿の企画から編集・校正等の一切において、格別のお骨折りをいただきました。

多くの関係者に対して、深甚の謝意を表します。

＊

滋賀県教育委員会では、平成三二年一月二〇日に多賀町立博物館において「平成三〇年度 滋賀の美と祭りのこころを伝える語り部づくり」の第三回目事業として、「明智光秀近江出身伝説を発掘・発信しよう」事業を実施した。「語り部づくり」は平成二九～三〇年度において、滋賀の豊かな文化財が所在する現地を訪れ、地域を舞台に歴史文化の魅力を伝えている実践事例を学ぶことで、新たな「語り部」を養成するための事業として実施したもので、第三回は「明智光秀近江出身伝説を発掘・発信しよう」をテーマに、専門講座、実践発表、および現地文化財学習を実施した。

あわせて、事業当日をはさむ平成三二年一月二二～二七日までの会期で、多賀町立博物館において滋賀県立琵琶湖文化館所蔵の「淡海温故録」と「近江輿地志略」を特別公開し、多賀町佐目の伝承地を撮影した写真パネルなどと組み合わせて展示・紹介した。

実施日時…平成三二年一月二〇日（日）一三時〇〇分～一六時〇〇分
実施場所…多賀町立博物館（あけぼのパーク多賀内）多賀町四手九七六・二
テーマ…明智光秀近江出身伝説を発掘・発信しよう

①専門講座 「明智光秀は多賀町佐目で生まれた？」

講師 井上 優（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課主幹）

②実践発表 「多賀町佐目の歴史文化を発掘・発信する」

発表者 澤田 順子氏（株式会社マルト取締役、多賀町佐目出身）

③現地文化財学習

多賀町立博物館で展示中の「淡海温故録」と「近江輿地志略」（いずれも滋賀県立琵琶湖文化館蔵）、伝説地の写真パネルを見学・学習。

○資料の特別公開

滋賀県立琵琶湖文化館×多賀町立博物館 特別企画

「明智光秀多賀出身説の文献公開」平成三二年一月二二～二七日

主催 滋賀県教育委員会

共催 多賀町教育委員会

協力 滋賀県立琵琶湖文化館、近江歴史回廊倶楽部

*右記の事業について報道資料提供するとともに滋賀県ホームページにおいて情報発信したところ、新聞各紙で報道いただいたほか、個人ブログなどでも様々な反響をいただき、担当者として感謝にたえない。中でも、個人ブログで紹介された記事の中でとくに印象的な表現をされた、Amebaブログ「あの戦国の現場へ行こう！〜愛知を中心に城と戦国史跡を訪ねて〜」の内容を記録しておきたい。愛知県在住の戦国愛好家によるブログであるが、事業の実施にかかる世論がどんなものであったかを知る上で有効な「史料」と思い、採録する。「トンでもない主張」といつていただいたことについて、尋常ならざる面白い取組みだと評価して情報拡散に協力いただいたものと受け止めて、筆者は衷心から喜んでいる。

明智光秀の生誕地は近江だった?! 滋賀県教育委員会が主張した理由

テーマ◆ニュース

二〇一八・一二・二二 〇四・五〇・五四

二〇二〇年NHK大河ドラマは、明智光秀を主役とする作品・麒麟がくる。

(中略)

光秀に関しては、信長に仕える以前がまるで謎で、生誕地説も現在の岐阜県可児市、恵那市の二つの自治体が、こちらだ!と主張しています。

しかし!!

今回、大河ドラマで何をやってもゆかりの地(笑)と言っている、滋賀県からトンでもない主張が出ました。

それが、

明智光秀は滋賀県の生まれ!

という作説説です。

詳しく言うと、現在の多賀町が生誕地という説なのですが、滋賀県教育委員会が音頭をとつてから気合入ってますよね。

ということで、平成三十一年一月二〇日(日曜日)にシンポジウム?みたい

なイベントが行われます。

待望の光秀大河で盛り上がる前に、チェックしてみるのも良いかもしれません。

〽明智光秀近江出身伝説を発掘・発信しよう

(二〇一九年一月一二日閲覧)

滋賀県立琵琶湖文化館

研究紀要 第三十五号

発行 平成三十一年三月

編集発行 滋賀県立琵琶湖文化館

印刷 図書同朋舎